

論文

発達障害幼児を担当する保育士への スーパーバイズの在り方に関する研究

清 水 浩

Research on the Ideal Way of Supervising Nursery Teachers
in charge of Infants with Developmental Disabilities

SHIMIZU Hiroshi

I 問題の所在と目的

1 A県における発達障害児支援体制の充実と推進に向けた取組

近年、児童虐待や貧困家庭の増加、発達障害児への支援など、保育士が支援の対象とする幼児の実態や保護者の抱える課題等が多様化、複雑化していることから、指導者及び支援者に対するスーパーバイズの重要性（保育所保育指針解説書、2017）や、保護者への相談援助等も含めたソーシャルワーク機能の充実（若宮、2015）等が求められている。

このような中、A県は、発達障害児支援体制の充実と推進に向けた取組として、医療機関（小児科・児童精神科）、市町（母子・障害福祉担当）、発達障害者支援センター、児童発達支援事業所、保育協議会、保健所等を主な機関とする発達障害者支援体制推進会議を実施し、保健・医療・福祉

のそれぞれの機関で実施している気になる子への支援について、横のつながりを強化した支援体制の構築を目指している。

具体的には、気になる子支援ネットワークの構築を図る取組として、①発達障害支援シリーズ基礎講座（保育士、幼稚園教諭、市町保健師等を対象とした発達障害児への支援にかかる技術向上のための研修会等）、②子育て支援スーパーバイズ事業（気になる子への支援について、保育士や幼稚園教諭が抱える支援困難なケースに対しての専門家からの個別助言指導及び保育現場での訪問支援、結果報告会等）、③児童発達支援事業所等連絡会（児童発達支援事業所間の連携強化と技術向上、関係機関との効果的な連携を図るための情報交換や研修の実施）等を行うなど支援の充実を図っている。

2 子育て支援スーパーバイズ事業

気になる子支援ネットワークの構築を図る取組の一つである、子育て支援スーパーバイズ事業では、保育士、幼稚園教諭、市町保健師等の支援者を対象とした大学等の専門家によるスーパーバイズ（年3回）及び、年度末にスーパーバイズを利用した保育士、幼稚園教諭等からの事例報告会等を実施し、支援技術の向上を図っている。

目的は、気になる子どもとその保護者を支援する市町の保健師や保育士、幼稚園教諭等が、個別支援計画に基づく支援方法や保護者への対応について専門家の助言を受け、児の特性に応じた適切な働きかけを行うことによって、健やかな成長を促すこととしている。

対象ケースは、①市町において継続的支援が必要と判断され、保健師が主体となって関与しているケース、②保育所や幼稚園において個別支援が必要と判断されたケース、③保健所で関わっているケース、の三種類であり、筆者はスーパーバイザーとして関わっている。

スーパーバイズの内容は、発達障害幼児及びその保護者への対応、園内における特別支援教育体制の推進、医療機関等関係諸機関との連携等様々

であり、支援をする立場として、特別支援教育に関する専門性はもちろんであるが、保育士、幼稚園教諭等のニーズを把握し、適切な対応や支援が求められる。その中でも特に、個別支援計画の作成と活用に関する内容が多くを占めており、障害幼児に対する実態把握や指導目標の設定、手立て、評価等を中心とした支援内容の分析が重要である。

今回の研究では、スーパーバイズで担当した事例に関して、スーパーバイズの内容を分析し、スーパーバイズの在り方について検討することを目的とする。

Ⅱ 方法

スーパーバイズで担当した事例に関して、スーパーバイズに関する内容を分析して、スーパーバイズの在り方について検討する。

Ⅲ 結果

1 スーパーバイズの概要

対象は、子育て支援スーパーバイズ事業に参加したD保育園保育士、E幼稚園教諭、期間は、202X年6月～11月、場所はA県B支庁C保健所であった。

2 事例1

(1) 対象者 D保育園保育士

(2) 対象児 Fさん 男児 年長

保護者は、Fさんに対して、冷たく関わってしまうことが多い。具体的には、大きい声を出し、叩いてしまったり、対立してしまったりすることがある。既往歴や相談歴は無い。

(3) 現在の状況と支援の実際

各領域における現在の状況と支援の実際を表1に示す。

表1 各領域における現在の状況と支援の実際

領域	現在の状況
生活習慣	<ul style="list-style-type: none"> ・ 基本的生活習慣は確立している。 ・ 給食では、人参やキャベツなどの野菜が苦手で、残すことが多い。この際、苦手な物は減らしてもよいと伝えているが、自分から許可を求めることは難しい。
コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> ・ 保育者を中心に、大人との関わりを求めていることが多くみられる。 ・ 友達を叩く、押す、暴言などの不適切な言動が多くみられる。
あそび	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一つの遊びに集中できず、転々としていることが多いが、保育者と一緒の時は、集中して遊べる時もある。 ・ 友達と一緒に遊べるが、自分の思い通りに進めようとしてトラブルになることがある。
運動	<ul style="list-style-type: none"> ・ ボールを使用した遊びでは、不器用さが目立つ。 ・ 簡単なルールを理解できないことがある。
集団行動	<ul style="list-style-type: none"> ・ 整列中にふらふらしたり、着席中に手足を動かしたりするなど、落ち着きのなさが目立つ。 ・ 集団の中で発表したり、リーダーをしたり、友達から注目されるのを喜ぶ様子がみられる。
こだわり	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の好きな物への執着がある。 ・ 手紙やキャラクターの切り抜きなど、物を介して人との関わりを持つことが多くみられる。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ 母親は自分の言うことをなかなか聞かないため、いらいらを感じており、支援が必要な状態である。 ・ 家庭の話をする時に、空想の話を本当にあったことのように話すことが多くみられる。

特にアドバイスを受けた点としては、①大人との関わりを求めるなど、承認して欲しい気持ちが強いが、どのように対応するとよいか、②友達との関わり方をどのように支援すべきか、③大人の目を気にして行動する姿をどう受け止め、支援するとよいか、の三点が挙げられた。

(4) 支援の方向性

問題行動として挙げられた、友達を叩く、押す、暴言などに対しては、感情のコントロールが困難であることや、集中することが困難で気が散ってしまうことなどから、ADHDの特性に合わせた支援を中心に考えた。

具体的には、①感情コントロール、②集中できる環境調整、③承認方法、等について検討する必要がある。また、自分をみて欲しい気持ちが強いいため、承認欲求への適切な対応について検討する必要がある。

一方、保護者支援に関しては、特性の捉え方や、愛着の形成と情動コントロールの発達等についての共通理解が必要であると考えた。また、子ども自身が安心感を持ってない状況で育ったため、他の子どもと全く協調できない、空想の話を本当にあったことのように話す、落ち着きがなく常にいらいらしている、褒められてもフリーズしてしまう等の様子がみられることから、行動や特性に対する理解も必要であると考えた。

(5) スーパーバイズの実際

スーパーバイズにおける支援の方向性等に関する具体的な助言内容を表2に示す。

表2 各領域における助言内容

領域	助言内容
生活習慣	<p>【身辺自立】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身の回りのことは自分ででき、身辺処理等は確立していることから、今できていることを確実にできるように定着化を図っていくことを確認した。 <p>【給食】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・給食では、人参やキャベツなどの野菜が苦手で、残すことが多くみられる。この際、苦手な物は減らしてもよいと伝えているが、自分から許可を取ることはできない。 ・偏食の有無に関する状況を確認する必要があると考える。偏食があるとすれば、触覚過敏も考える。 ・このようなことから、感覚過敏に関する内容について確認をした。 <p>1 特性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・感覚がとても敏感で、生活に大きな不便がある。 ・発達障害のある人の多くに感覚特異性がみられる。 ・感覚特性が、問題行動や社会性の問題に関与することもある。 <p>2 例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・明るい屋外をととても眩しく感じる（視覚過敏）。 ・特定の音がものすごく苦手（聴覚過敏）。 ・特定の肌触りの服は着ることができない（触覚過敏）。 ・他人から触られることが苦手、痛みを感じる（触覚過敏）。 ・手（手袋）や足（靴下）にもものを付けることを著しく嫌う。特定の衣服や布でないと着られない（触覚過敏）。 ・触診や超音波検査などを著しく不快に感じる（触覚過敏）。 ・特定の食べ物が苦手（偏食）。 →歯ごたえや口の中での動き、溶け方など、触覚で違和感を訴えているケースもある。 ・とても鈍感で不便がある（感覚鈍麻）。 ・香水、油絵の具、ラッカー系塗料、線香、柔軟剤、ユリの花、菊の花、病院、工場、給食の匂い等が苦手（嗅覚過敏）。

コミュニケーション	<p>【確認事項】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 保育者、保護者等、大人との関わりを求めていることから、同年齢との関わりや、大人との関わりに、承認、愛情等を求めているのかということに関して確認した。特に、保護者の目を気にして行動するため、友達との関わりが変わりやすいことが多くみられる。 <p>【問題行動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 友達を叩く、押す、暴言などがあるため、感情のコントロールに困難がみられるのではないかと考えた。
あそび	<p>【集中】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 一つの遊びに集中できず、転々としていることから、遊びに関しては、集中することが困難で、気が散ってしまうなど、注意や集中がうまくいかない状況である。集中できる学習内容や学習場面、また、余暇活動等について確認をした。 <p>【友達関係】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 保護者も一緒に遊ぶと集中して遊べる時もある。一方で、友達と一緒に遊べるがトラブルになることが多い。このことから、どのような状況でトラブルになるのかを整理することが必要である。
集団行動	<p>【行動特性】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 整列中、ふらふらしたり、着席中、手足を動かしたり、落ち着きのなさが目立つため、ADHDの特性を確認する必要性について助言した。 ・ 集団の中で、発表したり、リーダーをしたり、注目されるのを喜ぶので、承認の欲求に関する実態を確認した。
こだわり	<p>【こだわり】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 物への執着がある。特に、手紙やキャラクターの切り抜きなど、物を介して人と関わりを持つところが気になる。
その他	<p>【保護者の理解】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 言うことを聞いてくれず、母親がいらいらしたり、悪循環になったりしていることから、母親の支援も必要な状態である。 ・ 空想の話を実に本当であったかのように話す。

(6) 取組結果

①期間

202X年6月～11月（6ヶ月間）

②支援内容と変化

D保育園におけるFさんに対する支援内容と変化を表3に示す。

表3 Fさんに対する支援内容と変化

No	支援内容	変化
1	<ul style="list-style-type: none"> ・「友達に優しくできたらポイントゲット」を目標にして、保育者との一对一の関係を作った。 ・良い行動を認めて強化する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・まずは一对一の関係をとても喜んでいた。 ・ポイントゲットにはあまりつながらなかったが、よいところを褒められることで、優しさが増してきたように感じる。
2	<ul style="list-style-type: none"> ・気持ちの共感や代弁等を心掛け、一对一の関わりを持つようにした。 	<ul style="list-style-type: none"> ・困った時に、自分から保育者に言えるようになってきた。
3	<ul style="list-style-type: none"> ・新しく始める活動は視覚的に、絵や文字で表して伝えるようにした。 ・友達との関わりで、嫌な気持ちを感じたら、保育者に伝えられるよう支援を始めた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・絵や文字を見て理解できることが増えた。自分から進んでみて理解もできた。 ・始めたばかりでまだ自分から言えないが、促され伝えることはできる。
4	<ul style="list-style-type: none"> ・集団で指示を出した後は、一对一で一つずつ細かく伝えるようにした。 ・絵カードや写真を使って視覚支援を準備している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一つずつ伝えることで、理解して行動できる部分もあった。
5	<ul style="list-style-type: none"> ・Fさんと他児がトラブルになった時や、生活の中で良くない行動をした時には、落ち着いてから望ましい行動を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・少しずつではあるが、Fさんにとって嫌なことがあった時に、「やめて」と相手に言うことができたり、「やめてと言ったけど、聞いてくれない」と保育者に伝えたりすることもあった。

3 事例2

(1) 対象者 E幼稚園教諭

(2) 対象児 Gさん 女児 年中

保護者は言葉の遅れを気にしており、現在は言葉の教室に通い、支援を受けている。家庭と保育園で、一緒に様子をみていくとのことで話している。保護者は、G児に伝えたことは全て理解していると話しており、家での困り感は無いようである。また、既往歴や相談歴は無い。

(3) 現在の状況と支援の実際

各領域における現在の状況と支援の実際を表4に示す。

表4 各領域における現在の状況と支援の実際

領域	現在の状況
生活習慣	<ul style="list-style-type: none"> ・衣服の着脱、排泄など、身の回りのことは自分でできるが、外出後、食事前後のうがい、手洗い、衣服を畳むなど見通しはあるものの、面倒がってしないことが多い。 ・保護者の見守りの中であればできる。
コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> ・2語文で話をする。 ・語彙も少なく、自分の思いを言葉にできないため、思い通りにならないと、物を投げたり噛んだりする様子がみられる。 ・発音がはっきりしないところもあるため、友達に通じず、同様に怒る。 ・保護者の聞いたことに対しては、言葉よりも首振りやうなずきで答えることが多い。 ・話を理解する時としない時があり、意味が分かっているが、声色で首振りやうなずきをしているもあると感じる。 ・聞かれたことに対して、分からないことや自信のないことは、濁したり笑ってごまかしたりする。

あそび	<ul style="list-style-type: none"> ・年下児に対してふざけて追われることや追うことを楽しんだり、同年齢の女児とのままごとで、言われることに従ったり、後をついていったりして遊ぶことが多い。 ・ままごとやお絵描きが好きで、お絵描きは自分で描くことよりも、友達が描いているものを真似して描くことを楽しんでいる。 ・しかし、どの遊びも集中できず、すぐ次の遊びに移る。
運動	<ul style="list-style-type: none"> ・遊具の上を上手に歩くことができる。 ・階段の上り下り、キャッチボール等もできる。
集団行動	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児組の集会や帰りの会では、年下組と一緒にホールの後方で走り回っている。 ・保育者が座るように伝えるが、一度では聞けず、同じことを繰り返す。 ・クラスの帰りの会では、後ろを向いて他児にちょっかいを出したり、近くにあるものを触ったりして全く話が聞けない。 ・全体での絵本等はみている。
こだわり	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の行動に対して、人から言われたり注意されたりした時に、頑としてやろうとしなかったり、動かなかったりすることが多い。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年からグループが決まっているが、自分が赤チームということや、友達の名前など分かっていないことが多い。 ・広告をみて野菜など「これ何？」と聞くと、違う名前を答えたり、笑ってごまかしたりする。

特にアドバイスを受けたい点としては、①全体での話が聞けないので、話を聞けるようにするには、どうしたらいいのか、②頑としてやろうとしない時は、どう関わったらいいのか、の二点が挙げられた。

(4) 支援の方向性

コミュニケーションの困難さを挙げられていることから、自閉スペクトラム症の特性を考えた支援が求められる。また、視覚的支援の活用、分かる、安心する環境調整、保護者支援等の充実を図る必要がある。この背景には、言葉での指示が理解できているどうかの確認や、やり方を教え事前に練習するなどの検討が必要であると考ええる。さらに、小学校

就学に向けた移行支援、知能検査の必要性や、園での支援をどのように
つなげていくか、等の検討が必要である。

(5) スーパーバイズの実際

スーパーバイズにおける支援の方向性に関する具体的な助言内容を表
5に示す。

表5 各領域における助言内容

領域	助言内容
生活習慣	【身辺自立】 <ul style="list-style-type: none"> ・衣服の着脱や排泄など、身の回りのことは自分でできる。 ・外出後、食事前後のうがい手洗い、衣服を畳むなど、見通しはあるものの、面倒がってしないことが多い。一方で、保護者の見守りの中であればできる。 ・以上のことから、身辺自立に関する内容を確認した。
コミュニケーション	【確認事項】 <ul style="list-style-type: none"> ・2語文で話す。語彙も少なく、自分の思いを言葉にすることが困難であるため、思い通りにならないと物を投げたり噛んだりする姿がみられる。また、発音がはっきりしないところもあるため、友達に通じず同様に怒る。 ・一方、言葉の教室での状況では、聞いたことに、首振りやうなずきで答えることが多いことや、話を理解する時としない時があり、意味が分かっているが声色で首振りやうなずきをしている時もあると感じることがあること、さらに、聞かれたことに対して、分からないことや自信のないことは濁したり笑ってごまかしたりするなどを中心に、どの位理解しているかなどを確認した。

あそび	<p>【問題行動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ あそびの中で、追われることや追うことを楽しむことから、自閉スペクトラム症の特性がみられることを確認した。 ・ 同年齢の女兒とおままごとをして、言われることに従ったり、後をついて行ったりして遊ぶことが多いことや、自分で絵を描くことよりも、友達の真似して描くことを楽しんでいるということから、見本やモデルの必要性について確認した。 ・ 遊びが長続きせず、すぐ次の遊びに移ってしまうことから、活動の始まりと終わりの指示の重要性についても確認した。
運動	<p>【確認事項】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 遊具の上を上手に歩くことができる。 ・ 階段の上り下り、キャッチボール等もできる。 ・ 運動面では、特に問題となる点等はないことを確認した。
集団行動	<p>【行動特性】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 集会や帰りの会では、年下児と一緒にホールの後ろで走り回っている。 ・ 保育者が座るように伝えるが、一度では聞けず、同じことを繰り返す。 ・ 帰りの会では、他児にちょっかいを出したり、近くにあるものを触ったりして全く話が聞けない。全体での絵本等はみている。 ・ 集団行動の場面では、活動の見通しや分かりやすい視覚的支援の必要性について確認した。
こだわり	<p>【こだわり】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 人から言われたり、注意されたりした時に頑としてやろうとしなかったり、動かなかったりすることが多い。このことに関しては、聞こえていないで分からないのか、または、活動への見通しが持てないことへの不安があるのか等について確認した。
その他	<p>【確認事項】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分が赤チームということや、友達の名前など分かっていないことなどが多いことから、人への興味や関心の程度等について確認した。 ・ 広告をみて野菜などの名前を聞くと、違う名前を答えたり、笑ったりしていることがあるので、聞こえ方の確認や、やり過ごし方等について確認した。

(6) 取組結果

①期間

202X年6月～11月（6ヶ月間）

②支援内容と変化

E幼稚園におけるGさんに対する支援内容と変化を表6に示す。

表6 Gさんに対する支援内容と変化

No	支援内容	変化
1	<ul style="list-style-type: none"> ・絵カードを使い、次の活動の予告をする。 ・してはいけないことは「ダメ」と言わず、「してはいけません」という言葉を伝え、行動を調整できるようにする。 ・数字1～10まで数えるのが好きなので、順番を待ったり、片付けたりする時などに、1～10まで数えながらやることで、意欲を持たせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・気分によって異なるが、カードをみて行動できる（所持品の始末、席に座る、集会に参加等）。 ・友達への危害は、大分少なくなってきた。 ・10まで数えながらできたこともある。
2	<ul style="list-style-type: none"> ・ハイタッチやジェスチャー等で褒める。 ・ねらいを1つか2つに絞って関わる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・反応は薄いですが、褒められると嬉しそうな表情がみられ、自信になっている。また、良い行動にもつながっている。 ・食事時のねらいを明確にしたことで、自信を持って食べる姿がみられてきた。

IV 考察

スーパーバイズにおいては、限られた時間や回数等の中で、相談者の話を聞きながら、問題点の整理と発達障害に関する障害特性の理解を中心に、対象児の全体像や発達の状況、課題の状況等について把握をする力が求められる。

今回の研究では、子育て支援スーパーバイズ事業におけるスーパーバイザーとしての立場から自己評価を行った。このことから、スーパーバイズを行うにあたり、発達障害に対する専門性を持ち、傾聴的態度で支援を行う必要があることはもちろんであるが、相談を進める際に配慮をすることが必要である二点について述べる。

1 個別支援計画

実際のスーパーバイズの場面では、行動の見立て方や目標の立て方等を中心に、個別支援計画の内容に沿って助言等を進めることが多くなっていることから、保育担当者が、発達障害幼児に対して支援をする際に、関わり手としての枠組みを持ち、個別支援計画を作成して対応する必要がある。

しかし一方で、個別支援計画の作成に関しては、実態把握、長期目標、短期目標、支援方法、評価等を検討する中で、各項目の内容等を絞り込めないことが多くみられる。

総務省（2017）は、発達障害者支援に関する行政評価・監視－結果報告書・勧告の中で、「支援計画等作成対象とすべき児童生徒の考え方を提示しており、今後、全国的にも支援が必要な子どもに対し計画が作成され、適切な支援につながる児が増えることが期待される。」としている。

このようなことから、スーパーバイズの際には、保育者が支援の枠組みを持つことができるように助言を行う必要がある。

2 スーパーバイズに関するシステムの在り方

保育現場においては、市町保健師との連携に関する必要性が多く求められており、具体的には、5歳児発達相談との連携や、保育を担当する職員の専門性を高める内容に関する保健所の役割等が挙げられる。

現在、スーパーバイズ事業に参加し、幼稚園、保育園職員に対して、発達障害幼児への支援の在り方等に対しての助言等を行っているが、幼稚園、保育園職員一人一人が専門性を高め、充実した支援を行えるようにするた

めに、適切な助言等が求められる。

今後は、個別支援計画の活用において、各関係諸機関の役割を再確認し、スーパーバイズのさらなる充実を図る必要がある。また、その際、保健師の役割を共通理解し、スーパーバイズにおける位置付けを明確にする必要がある。

V まとめと今後の課題

今回の研究では、発達障害幼児を担当する保育士へのスーパーバイズの在り方について、実際に行ったスーパーバイズに関する自己分析を行った。このことをとおし、発達障害幼児に関する専門的な知識や、スーパーバイズで求められる資質を高める必要性について明らかにすることができた。

保育者の専門性を活かした保護者支援については、「子どもの保育の専門性を有する保育士が、保育に関する専門知識・技術を背景としながら、保護者が支援を求めている子育ての問題や課題に対して、保護者の気持ちを受止めつつ、安定した親子関係や養育力の向上を目指して行う子どもの養育（保育）に関する相談、助言、行動見本の提示その他の援助業務の総体」（保育所保育指針解説書、2017）と述べられており、保育指導も含めた保育現場における保護者支援を総括的に捉えたものが保育相談支援であるとしている。

一方、金城（2017）は、相談援助、保育相談支援に関する保育者の認識や、取組の現状と課題を明らかにしているが、保護者からの相談内容は、第1位園での子どもの様子、第2位しつけ、第3位子どもの障害、第4位子育ての不安、であると報告している。

今後は、以上のような内容を中心に、スーパーバイズに関する専門性をさらに高めながら、ライフステージを通じた切れ目なく、重層的な支援が受けられるようにするための支援体制整備に努めていく必要がある。

引用文献

- 1) 保育所保育指針解説書（2017）厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課.
- 2) 金城悟（2017）保育現場における相談援助・保育相談支援の現状と課題. 東京家政大学研究紀要第57.（1）.
- 3) 総務省（2017）発達障害者支援に関する行政評価・監視－結果報告書・勧告.
- 4) 若宮邦彦（2015）保育スーパービジョンの理論と動向. 南九州大学人間発達研究. 第5巻. 87-92.

（山形県立米沢女子短期大学教授）